



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	夏季集中研究会資料 発達の連続性および質的变化について：5歳～7歳(6歳～8歳)の発達を心理学的観点からとらえる
Author(s)	岩立, 京子
Citation	研究紀要 / 東京学芸大学附属幼稚園, 13/14: 116-117
Issue Date	2003-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/41064">http://hdl.handle.net/2309/41064</a>
Publisher	
Rights	

## 「発達連続性および質的变化について」

## 5歳～7歳(6歳～8歳)の発達を心理学的観点からとらえる」

幼小の連続性を考える際、異種学校間の教育目標やカリキュラムの構造化のみならず、指導法の連続性などを考慮する必要がある。その際、それらのいずれもが発達にふさわしいものでなければならず、教師による発達の理解は不可欠となる。

## 3、4歳と、5歳から7歳(6歳から8歳)の大きな違い

5歳から7歳(6歳)以降の子どもは、3歳、4歳の子どもと構造的な違いを示す。それまでに獲得した技術や能力、関係性を自分の枠組み、たとえば、目標やルールをもとに使用していく。また、自己や他者についての多様な理解をもとに、自分で自分を形成し始めたり(自己形成)、他者との関係を積極的に取り結んでいこうとするのが特徴といえる。ただし、それには、具体的に参照できる手がかりが必要であったり、自分が好きな大人、信頼できる大人の存在が必要である。

## 5歳～7歳(6歳～8歳)における認知的発達、社会・情緒的発達について

発達にふさわしいカリキュラムの構築・実践には、発達の一般的コースの理解、個人差や文化差の理解が欠かせない。ここでは、5歳から7歳(6歳から8歳)の一般的コースの大筋を示す。

## 前操作期から具体的操作期への発達

発達理論はこれまでいくつかの幼児教育プログラムを作り出してきたが、近年はピアジェをはじめとする認知心理学領域における発達理論が注目されている。たとえば、前操作期から具体的操作期への変化である。ピアジェは7、8歳に急激な変化が生じるのではなく、5歳頃から心のなかで表象をうまく、また柔軟に操作できるようになるとした。たとえば、遊びにおいて、ルールを理解し、それに従い、ゲームができるようになる。また、多面的な観点を事象を理解できるようになる(脱中心化)。それに伴って道徳判断力も大きく発達する(主観的判断、視点取得能力にもづく共感性)。同じ言葉が複数の意味をもつことを理解したり、自己の多面性を理解・表現したりできるようになる。

## 認知・言語面での発達

5歳以降の子どもは、それ以前の子どもと違って次第に他者の観点を理解し、問題の様々な点に同時に焦点をあてられるようになる(脱中心化)。心のなかで段階を踏んで考え、また、逆戻りして考えたり、引き算を止めて出し算に変えてみるなど、一つの操作をやり直して、他の操作を行うことができるようになる(可逆性、操作、保存)。A>B、B>CゆえにA>Cなどの関係(系列化)や、「赤い花、白い花、花」「犬、猫、動物」の関係や「3

つの玉、5つの玉、玉」の関係を理解し始める(分類)。

この時期の子どもは対象や関係を表すために言葉や数などの象徴を使用することはできても、まだ、参照できる具体物が必要。

## 1) 短期記憶と長期記憶

この時期に保存や分類能力が高まるのは、記憶能力が高まるからだと考えられている。この時期、短期記憶の成績が向上する理由は、一般的に注意集中が高まり、関係ない情報を無視できるようになるからである。また、短期記憶の成績の向上とともに長期記憶が発達する。これは、リハーサルや体制化などの記憶方略が発達するし、記憶する必要感も高まっていくからである。メタ記憶(記憶についての知識、記憶についてのセルフモニタリングや自己制御)の能力が高まる。子どもは、この時期、自分自身の思考過程について考えたり、振り返ったりして、メタ認知の領域を向上させる。記憶能力が高まるもうひとつの要因は、知識や概念の蓄積である。ある知識を多くもっている子は、より一層記憶できるようになる(Chi 図4-7参照)。

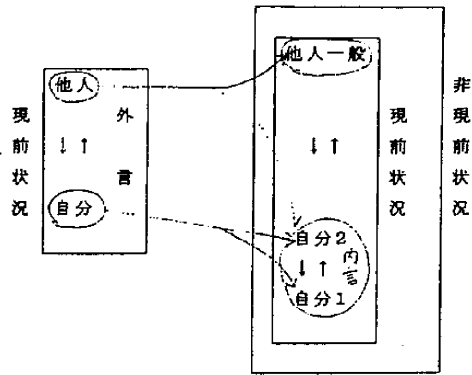
大人と比べると、あらゆる認知領域での知識は乏しいので、広く浅く学習テーマを網羅するのは効果的でない。特定のテーマの深い知識と理解を得られるような統合的カリキュラムや長期プロジェクトのような実践が有効とされている。たとえば、恐竜プロジェクト、音プロジェクトなど。

## 2) 言葉とコミュニケーション

言葉とコミュニケーションの発達は認知発達と密接に結びついている。一次的ことばから二次のことばへの劇的な変化がある。

一次的ことばと二次のことば(岡本、1986)

コミュニケーションの形態	一次的ことば	二次のことば
状況	具体的現実場面	現実を離れた場面
成立の文脈	ことばプラス状況文脈	ことばの文脈
対象	少数の親しい特定者	不特定の一般者
展開	会話式の相互交渉	一方向的自己設計
媒体	話しことば	話しことば・書きことば



一次的事 二次的事  
(岡本, 1986)

さらに、学んでいることについての会話を行うことによって、コミュニケーション、自己表現、理解、推論、問題解決の能力を高めることが多くの研究で示唆される。また、大人の有効な介入が子どもの会話を長引かせたり、話題を広げたりすることができることも示唆している。この時期の子どもは大人や友だちとの対話を楽しむようになる。5歳から7歳(6歳から8歳)の子どもは冗談、駄洒落、早口言葉、などなどが大好き。単なるトイレギャグとは違う。

### 3) 道徳面

推論能力の向上、多面的観点の理解をもとに、行動する上でのルールを考えたり、反省したり、正邪を理解できるようになる。メンバーの納得を前提にルールは可変であると認識する。6歳頃、道徳的ルールを内面化し始める。これが「良心」の発達である。この時期、自分の行為を内面的に監視し始め、より責任ある行動が出来始めるが、まだまだ不完全。平等から公平への発達。これらの発達は自動的に生じるわけではなく、経験や大人のあり方に強く影響される。

### 社会的・情緒面での発達

他者の観点の理解とともに、自己理解へと進む。「あの子は好きだが、こういうところが嫌いだ」(同時に複数の感情をもつ)「僕はサッカーは好きだけど自転車は嫌い」(多面的理解)「私は・・・が得意だ、やさしい」(能力・性格などの安定的理解)などをするようになる。自分について言葉で表現できる一般化したイメージをもつ。ジェンダー意識が発達し、文化的な性別や期待と結びついて、行動や友だち選択などに強く影響してくる。自尊心が、より現実的でより正確になってくる。自己概念や自尊心を形成する経験がこの時期に重要で、肯定的な自己イメージを抱けるようにしたい。仲間とうまく作業し

たり、交わったりする能力が、この時期の重要な社会情緒面での発達課題となる。

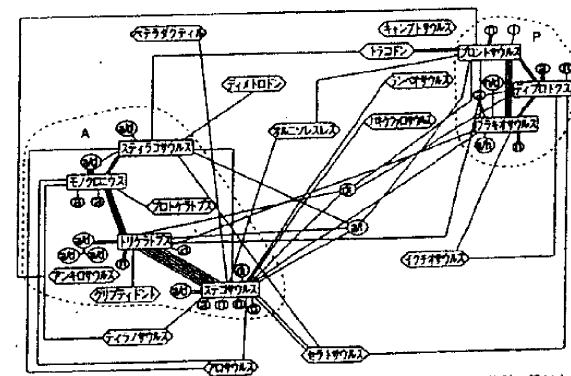
### 年長、低学年教育への示唆

具体物を操作し、直接体験から学べるようにする。楽しい体験なら何でもよいというのではなく、その子に意味をもたらす体験が必要。すなわち、それは子どものもつ既知知識(先行知識)と新しい学習を結びつける体験であり、そのために教師は子どもの能力を支え、記憶と推論の能力を高める援助が必要。たとえば、問題状況をロールプレイングで再現、豊かな会話を生み出す協同的な小グループでのプロジェクトの機会の設定と支援など。知識や技能の獲得のみならず、好奇心、ユーモア、人の役にたきたいなどの性向なども身につけられるカリキュラムや指導法を教師が計画する必要がある。読みたい気持ちと読む技術、教を学ぶことと教を用いて問題解決することなどを考慮する。

### 個人差および文化的多様性への対応

一般的な発達コースだけでなく、個々の子どもの個性、学びのスタイル、経験、特定の家族背景を理解する。教育実践の原則は、子どもが小さければ小さいほど、背景が多様であればあるほど、必要な指導法と教材の幅も広がる。

発達とは連続的変化過程であるが、その過程において、認知的スキーマの構造的変化などが確実であり、3、4歳と5歳から7歳(6歳から8歳)とは質的な変化が生じていると考えられる。これらの発達を理解し、発達にふさわしいカリキュラムの構築、実践というチャレンジが可能である。



Aの群に属するのは肉食竜である。Pの群は巨大肉食竜からなる。恐竜間の関係の線はとくに密接なつながりがあることを示す。  
a=外見、d=防衛メカニズム、di=食性、a=ニックネーム、h=顔見地、l=移動方法、0=その他  
図4-7 ある5歳児の恐竜についての知識を意味ネットワークの形で表したものの(すほか, 1983)